

反事実・非現実を表す副詞

——「もう少しで」型と「あやうく」型を中心に——

ジョンビョンミン

1. はじめに
2. 先行研究
3. 「もう少しで」「あやうく」と「ところ」
4. 反事実表現
5. 「もう少しで」と「あやうく」の価値性
 5. 1. 「もう少しで」型
 5. 2. 「あやうく」型
6. 「もう少しで」「あやうく」と予測様態の共起関係
7. 「もう少しで」型と「あやうく」型の共通点・相違点
8. おわりに

1. はじめに

本稿では、日本語の反事実・非現実表現を、「もう少しで」「あやうく」などの副詞を中心に考察していく。「もう少しで」は「もう」「少し」「で」という連語であり、「あやうく」は形容詞「あやうい」の連用形であるが、状況の実現が危ぶまれることを表すたびに副詞の性質を持つことになる。これら副詞の意味と文末表現の意味、副詞と文末表現の共起関係は、日本語で反事実・非現実をいかに表すかということに密接に関わっている。

まず、東京行きの新幹線に乗っているある人を想像してみよう。新幹線が横浜を通るとき、その人は次のように言える。

(1) もう少しで東京につく。(作例)

しかし、この状況を次のようには言えない。

(2) ?もう少しのところで東京につく。(作例)

「もう少しで」の後ろに「ところで」がつくことで不自然な文になる。

また、危機に陥ったが、ぎりぎり抜け出したときは次のように言える。

(3) あやうく難を逃れた。(作例)

「あやうく」の場合は後ろに「ところで」が付いても非文にならない。

(4) あやういところで難を逃れた。(作例)

つまり、「もう少しで」に「ところで」が付くときは意味に変化が起きるが、「あやうく」に「ところで」が付くときは意味の変化が起きない。このように、両副詞の意味変化の様相が違う理由は何なのか。

また、「もう少しで」と「あやうく」は文末に「ところだった」が付く場合、必ず反事実を表す。

(5) もう少しで失敗するところだった。→ 発話時現在、成功している。(作例)

(6) あやうく失敗するところだった。→ 発話時現在、成功している。(作例)

「もう少しで」と「あやうく」は異なる意味を持っている副詞である。しかし、文末に「ところだった」が付いて、反事実表現になり得る。ただし、その様相は簡単ではない。

(7) もう少しで成功するところだった。→ 発話時現在、失敗している。(作例)

(8) ?あやうく成功するところだった。(作例)

(5)(6)は話し手の立場からみて、プラスの現実になっている。しかし、(7)(8)のように話し手がマイナスだと想定する価値を持つ述語で発言すると、「もう少しで」の場合は問題なく使えるが、「あやうく」の場合は文のすわりが悪くなる。しかし、これは単なる価値の問題ではない。

(9) あやうく成功した。(作例)

例文(9)は(5)(6)と異なって、述語のテンスが過去になっているが、文のすわりがいい。ここで、「もう少しで」と「あやうく」が反事実になり得る理由、また、両副詞が異なる反事実の様相を持つ理由は何なのか。

この問題と関連して、「あやうく」が予測様態と共起する条件は「もう少しで」と異なる。

- (10) 「私は兄の人生を受け継いだ。兄の机、事業、機械や装置類、兄の敵、馬たちと愛人を受け継いだ。私は兄の人生を受け継いで、もう少しで殺されそうになった」(BCCWJ)
- (10)' 「私は兄の人生を受け継いだ。兄の机、事業、機械や装置類、兄の敵、馬たちと愛人を受け継いだ。私は兄の人生を受け継いで、あやうく殺されそうになった」(作例)

BCCWJ で使われている原文は(10)であるが、(10)'の方が原文の「もう少しで」より文が安定感を持つ。「もう少しで」「あやうく」と予測様態の共起の条件が異なる理由は何なのか。

以上の三つの疑問点以外にも、「もう少しで」型に属する副詞には何があるか検討する。「もう少しで」は「もう」と「少し」と「で」の連語である。そこで、「もう少しで」が合成された方法と似ている副詞、または意味の組合が似ている副詞は「もう少しで」と似ている意味および性質を持つ可能性があるかと仮定できる。だから、連語の副詞を考察する必要がある。

「あやうく」型は「もう少しで」型のような連語ではなく、形容詞の連用形である。だから、「あやうく」型に当てはまる副詞を検討するためには、形の面を検討するよりは同じ意味を持っている副詞を検討する。

2. 先行研究

田窪(2008)では反事実表現を次のように定義している。

反事実的な仮定からの妥当な推論を断定、あるいは質問することを表す文であるといえる。したがって、条件文が反事実的であるためには、まず、前件が偽でなければならない。前件が偽であるためには、条件文の反事実的解釈では、前件命題の真偽が決定していることが前提となる。つまり、前件命題を評価すべき現実が存在し、これに照らし合わせて、偽であることが確定することで反事実性を保証するのである。…(中略)…すなわち真偽が決定していることの必要条件として、前件が現実^に言及していることが必要になる。(p. 27)

本稿はこの定義を基にして「反事実」を定義する。

反事実の定義以外にも、田窪(2008)では時点を表わす語を「ところ」の前につけた場合、「今のところ」、「ここのところ」、「本当のところ」、「実際のところ」、「正直「の」ママところ」等といった、「現在、真実、自分の本当の信念」といった類の語しか来ないことを指摘している。これらは、「今日現在で評価すれば」、「いま現在の状況を述べれば」、「本当の状況を述べれば」といった意味であると述べている。つまり、田窪(2008)が述べていることによれば、「ところ」は話し手の観察し、評価した時点を指定する表現だといえる。

しかし、田窪(2008)では「ところ」が時点を表わす語と共起して、評価した時点を指定する

ことを述べているだけである。「もう少しのところで」のように反事実を表わせる表現に対しては言及していない。

また、日本語の非現実の定義に対して定義している先行研究はない。そのため、本稿では、「発話時からまだ起きていない現実」を非現実と定義して考察する。

国立国語研究所（1991）では、状況の完了、時間の前後関係、程度・尺度を表す副詞を考察している。「もう少しで」型に属する連語の副詞を検討するために、国立国語研究所（1991）の時・程度を表す副詞を参照して反事実・非現実副詞の語彙的意味を考察する。国立国語研究所（1991）で載っていない副詞でも、反事実・非現実を表せる副詞・組み合わせは考察の範疇に入れる。語彙的意味の考察から反事実・非現実副詞の意味的考察もできる。

国立国語研究所（1991）と BCCWJ を参考にして、考えられる反事実・非現実副詞は次の様である。

(11) あと少しで、あとちょっとで、あともう少しで、もう少しで、もうちょっとで…

各単語を分析すると、完了相（アスペクト的要素）、発話後（テンス的要素）、程度の低さ・尺度の小ささ（モダリティ的要素）を表す副詞が組み合わされて反事実・非現実を表す副詞になることが分かる。この組み合わせの基準を参考にして、他にも使えと考えられる副詞を組み合わせさせて BCCWJ で検索してみたことで、次のような副詞が使われていることが分かった。

(12) あと少しのところで、すんでのところで、寸前のところで、ぎりぎりのところで、いま一歩のところで、もう少しのところで、あともう少しのところで…

(12)の副詞も(11)のように三つの要素から組み合わせられた副詞である。ところが、後ろに「ところで」が付くことで拡張性が大きくなって、様々な副詞と結合できるようになる。拡張性だけではなく、意味の領域にも変化が起こる。「ところで」が付くことで、反事実の意味が出る。

「あやうく」型に当てはまる副詞は次のようである。

(13) あやうく、あやういところで、あわや、からくも、すんでのことに、まかり間違えば…

3. 「もう少しで」「あやうく」と「ところ」

「もう少しで」と「もう少しのところで」の違いについて検討する。

「もう少しで」は、ある状況に、「少し」という小さい要素が加われば、その状況がある状態に

導かれるということを表わす。だから、「もう少しで」型には IF の意味が含まれている。「少し」だけではなく、必ず「もう」が「少し」を修飾して、ある状態が成り立つまでの距離が遠くないことを表わしている。そのため、普段「もう少しで」は近い未来・達成直前（非現実）を表す表現として使われる。過去形と共起すると、文全体が反事実の意味に変わる。ただし、過去形だけでは文のすわりがよくない。そのため、「たのに」「たが」のような逆接の文末表現を共起させて文の安定感を確保する必要がある。

- (14) もう少しで博士になる。(近い未来) (作例)
- (14)' ?もう少しで博士になった。(作例)
- (14)" もう少しで博士になった (のに/が)。(作例)
- (15) もう少しで完成する。(達成直前) (作例)
- (15)' ?もう少しで完成した。(作例)
- (15)" もう少しで完成した (のに/が) (作例)

また、「もう少しで」の後ろに「ところで」が付くと、主に反事実を表すことになる。

- (16) *もう少しのところで完成する。(作例)
- (17) ?もう少しのところで完成した。⁽¹⁾
- (17)' もう少しのところで完成した (が/のに)。→ 完成できなかった。(作例)

それでは、「ところで」が付くことで非現実から反事実の意味が変化した理由は何だろうか。

「もう少しのところで」は「もう少し」という要素に、本来あるべきコース (Natural Course of Events (NCE)) (以下、NCE) を表す「ところ」⁽²⁾が付いているものだと考えられる。つまり、「ところで」が付くことで「もう少し」が本来あるべきコースだと仮定されることになって、「本来なら、～だ」という意味を持つことになる。「本来なら」が使われているということで状況は現在、話し手が状況の結末を知っていて、その結末は「本来なら」とは逆の方向に向かっていることを表す。発話時現在、真偽関係が偽であるものに対する推定の意味を持つため、「もう少しのところで」は反事実の意味が現れる。

「もう少しで～ところだった」も「もう少しのところで」と同じ性質を持つ。しかし、「もう少しで～ところだった」と「もう少しのところで」は動詞のテンスが逆になる特徴がある。

- (18) もう少しで完成するところだった。(作例) → 完成できなかった。
- (18)' ?もう少しで完成したところだった。(作例)

(18)'の「～たところだった」は状況が発話時直前に終わったことを表す。「もう少しで」は状況が成り立っていない状況を表すため、「～たところだった」とは相性が合わない。だから、「もう少しで～ところだった」は述語が非過去テンスと共起し、「もう少しのところで」は述語が過去テンスと共起するのが自然である。

一方、「もう少しで」と「もう少しのところで」の関係と違って、「あやうく」は「ところで」と共起しても意味が変わらない。

(19) あやうく合格した。(作例)

(19)' あやういところで合格した。(作例)

(19)(19)'は全く同じ意味として使うことができる。ただし、「あやうく」だけでは文体が古めかしいというニュアンスを持つため、現在会話文の中で自然に使われているのは「あやういところで」の方である。

「あやういところで」は反事実性を持たない。なぜなら、「あやういところで」の「ところで」は、NCEを表す「ところ」ではないためである。「あやういところで」の「ところで」は場面を表す。つまり、「あやういところで」は「危険な場面で」という、ただの場面切片⁽³⁾の表現になっているため、NCEを仮定することにはならない。だから、「あやういところで」と「あやうく」は同じ表現だといえる。

これに対して、「あやうく～ところだった」と「あやういところで」「あやうく」とは違う表現である。

(20)' あやういところで合格した。(作例) → 合格した。

(20)"?あやうく合格するところだった。(作例) → 不合格だった。

同じ述語を用いた場合、「あやうく～ところだった」と「あやういところで」は状況の成立が逆転する。「あやういところで」は話し手の価値が競合関係にあって、今は現実していることを表す。だから、文のテンスは過去及び完了などの形が使える。「あやうく～ところだった」は反事実を表すため、述語に表現されている状況は成り立っていない。だから「ところだった」の前の動詞の形は非過去形になり、述語で述べている状況とは正反対の状況になる。

4. 反事実表現

3章では「もう少しのところで」と、過去形と逆接文末表現の「たのに」「たが」の共起が反事実表現になることを説明した。これら以外にも、「もう少しで」と「あやうく」の文末に「と

ころだった」が付くことで反事実を表すことができる。

(20) もう少しで死ぬところだった。(作例)

(21) あやうく死ぬところだった。(作例)

文末に付く「ところだった」は、文全体を NCE だと仮定する。そうすることによって、文が「本来なら、～だ」という意味を持つことになる。「本来なら」が使われているということで状況は現在、話し手が状況の結末を知っていて、その結末は「本来なら」とは逆の方向に流れていることを表す。

では、反事実を表す「もう少しで～ところだった」と「あやうく～ところだった」の違いは何だろうか。

(22) (彼は) もう少しで助かるところだった。(作例)

例文(22)は、「彼」が小さい時間あるいは努力が足りなくて死に至ったことを表している。しかし、次の例文はすわりが悪い文である。

(23) ?(彼は) あやうく助かるところだった。(作例)

例文(23)も、「彼」が小さい時間あるいは努力が足りなくて死に至ったことを表している。ただし、(23)は、(22)と違って「彼」が死に至ってよかったと思っているニュアンスまで含んでいる。従って、一般に(23)は不自然だが、暗殺者がというような特殊な場合だと成り立つ。

5. 「もう少しで」と「あやうく」の価値性

「もう少しで」と「あやうく」の価値性は、本来の意味から起因するものだと考えられる。「もう少しで」は、ある状況に、「少し」という小さい要素が加わったら、その状況がある状態に導かれることを表す副詞である。だから、「もう少しで」型は IF の意味を含んでいる。「もう」は「少し」を修飾して、ある状態が成り立つまでの距離が遠くないことを表す。よって、「もう少しで」は普段非過去形と共起して、近い未来・達成直前（非現実）を表す。過去形と共起するためには、逆接文末表現の「たのに」「たが」などと一緒に使われる必要がある。このように、「もう少しで」はただ状況の成立距離を表しているため、状況に関する話し手の価値性は含まれていない。従って、全体としてプラス状況もマイナス状況も表せる。

- (24) もう少しで遅刻するところだった。→ 約束の時間に間に合った。→ プラス状況 (作例)
 (25) もう少しで間に合うところだった。→ 約束の時間に遅刻した。→ マイナス状況 (作例)

「あやうく」には IF の意味が含まれていない。ただ、(26)(27)は話し手の立場からプラス状況とマイナス状況が一時競合関係に置かれて、結果としてプラス事態になったということを表す。すなわち、「あやうく間に合った。」は実現のプラス状況を表し、「あやうく遅刻するところだった。」は反事実を表すことによってやはり現実としてプラスを表している。

「あやうく」は全体としてのプラスの状況を表し、実現済みの状況を表しているため、非過去と共に起は難しい。また、競合関係から得た状態を表し、IF の意味を持たないため、「あやうく」だけでは反事実を表せない。反事実を表すためには、文末で NCE を表す「ところだった」と共に起する必要がある。

- (26) あやうく遅刻するところだった。→ 約束の時間に間に合った。→ プラス状況 (作例)
 (27) あやうく間に合った。(作例)
 (26)'?あやうく間に合うところだった。→ 約束の時間に遅刻した。→ マイナス状況 (作例)
 (27)'?(私は) あやうく間に合う。(作例)

以上述べた「もう少しで」型と「あやうく」型をさらに次節で形式化し、結果としてプラス事態になったということを検討する。用例は BCCWJ (以下、B) から参考した。

5.1. 「もう少しで」型

「もう少しで」型の意味を形式化すると次のようになる。まず、[]は話し手が想定する世界を表す。【 】は現実世界を表す括弧であって、主に「あやうく」型で使われる。話し手は「もう少しで」型を使うことによって、状況から「少し」という時間が加われば、状況が成り立つと認識していることを表す。従って、[E+[IF]]は話し手が現実すると想定している世界であって、実際に現実の如何は分からない。

また、[E+[IF]]は話し手が状況を現実化しているものとして想定し、[E+[IF]]_{CF}は状況が今の状況と正反対の状況になって欲しい(反事実)と認識していることを表す。従って、反事実の[E+[IF]]_{CF}は【~E】_Rと同じ意味であり、[~E+[IF]]_{CF}は【E】_Rと同じ意味になる。詳しい式の定義は以下のようである。

- (28) 「もう少しで」型

E : EVENT、R : REALIS (現実)、CF : COUNTERFACTUAL (反事実)、～ : NOT

[] : 現実世界、**[]** : 話し手の想定世界

$[E + [IF]]_{CF} = [\sim E]_R$ 、 $[\sim E + [IF]]_{CF} = [E]_R$

E : 東京に着く、～E : 東京に着かない

$[E]_R$: 東京に着いた、 $[\sim E]_R$: 東京に着かなかった

$[]_{CF}$: もう少しのところで、ところだった、た (が／のに⁽⁴⁾)

$E + [IF]$: もう少しで東京に着く、 $\sim E + [IF]$: もう少しで東京に着かない

$[E + [IF]]_{CF}$: もう少しで東京に着くところだった。

もう少しで東京に着いた (が／のに)。

$[\sim E + [IF]]_{CF}$: もう少しで東京に着かないところだった。

もう少しで東京に着かなかった (が／のに)。

1. $E + [IF] = [E + IF]$

もう少しで東京に着く。

? $E + [IF] = [E]_R$

?もう少しで東京に着いた。

2. $[E + [IF]]_{CF} = [\sim E]_R$

もう少しのところで東京についた。

もう少しで東京につくところだった。

もう少しで東京に着いた (が／のに)。 = 東京に着かなかった。

$[\sim E + [IF]]_{CF} = [E]_R$

もう少しのところで東京に着かない。

もう少しで東京に着かないところだった。

もう少しで東京に着かなかった (が／のに)。 = 東京に着いた。

(28)の1は非現実表現である。図式が表しているのは、ある状況が成り立っていない状況に置かれているが、「少し」という短い時間さえあれば、状況が成り立つという仕組みであることを表している。まだ成り立っていない状況に対して述べるため、過去形との共起は不自然である。

「もう少しで」は近い未来・達成直前を表すため、非過去形とよく共起することを表す。過去形と共起するときは反事実を表すことになるが、このときの文のすわりは悪い。文の安定感を確保するため、逆接文末形式「が／のに」と共起する必要がある。

2は反事実表現である。「もう少しで」の後ろに「ところで」もしくは「ところだった」「た(が／のに)」がつくことで、現在の状況と文の状況が正反対の状況(反事実)に置かれている仕組みを表している。「もう少しで」型はプラス状況とマイナス状況両方の価値と共起できるため、プラス反事実表現も、マイナス反事実表現も表し得る。従って、「もう少しで」型の形式には、E⁺とE⁻を述べる必要はない。(p. 11参照)

反事実表現は過去の状況に対する話し手の判断を表す。しかし、非現実表現は発話時からまだ起きていない現実を表す。つまり、反事実表現と非現実表現は形式も違い、文の状況時間も違う表現である。

それでは「もう少しで」の非現実を表す用例から分析する。

(29) 女は困惑した表情を押し隠そうとして、口籠る。

「今だめ…もう少しで林檎、煮えるし」(B)

(30) 「何時だと思ってるの」

「もう少しで読みおわる」

肩にのびてきた母親の手を治子が払う。(B)

(29)の話し手は近い未来で林檎が煮えること、(30)の話し手は「読む」状況が終わる(達成する)直前であることを表している。

次は「もう少しで」が反事実になる用例である。「もう少しで」はNCEの「ところ」が共起して反事実を表す。

(31) 「はーい。わかってるよ。あー、外で寝ると蛇がきて、もう少しで死ぬとこだった。あー、こわ！」(B)

また、「もう少しで」に過去形が共起して反事実を表すこともある。その場合は、文のすわりをよくするため、「たのに」「たが」などの逆説文末表現と共起する。

(32) 「ああ」と若者が力のない声で答えた。追跡の興奮が鎮まるにつれて、ずしんと暗い絶望感が迫ってきた。「もう少しで追いつけたんだが」言ってもしようがないと思いながら、それでも言ってみる。(B)

(33) くそ、じゃましやがって。もう少しでかたがついたのに。(B)

次は「もう少しのところで」で反事実になる用例である。すでに分析した通り、「ところ」が

付くことで、真偽関係が偽であることが確定されて、そのことから架空の状況を推定することになるため反事実性が確定される。

- (34) 中堂は洗面所の横にある白い戸棚の戸を引いた。どさっと何かが落ちて来た。もう少しのところで悲鳴を上げるところだった。落ちて来たのは、血だらけになったパジャマとバスタオル。(B)

5.2. 「あやうく」型

「あやうく」型の意味構造を式で表すと次の様な形になる。「あやうく」型は「もう少しで」型とは違って、プラス、マイナス価値が文の成立に重要な要素になる。 E^+ はプラス状況を表し、 E^- はマイナス状況を表す。

「あやうく」型は状況の競合関係から得たプラス状況を表し、そのプラス状況は既に成り立っている世界を表す。競合関係は OR で表し、【 】で現実世界を表す。

また、文末に「ところだった」が付いて反事実を表すときは、「もう少しで」型のように話し手の認識世界を表すことになる。従って、想定世界を表す[]を用いる必要がある。詳しい式の定義は以下のようなものである。

- (35) 「あやうく」型

E : EVENT、 R : REALIS (現実)、 CF : COUNTERFACTUAL (反事実)、 \sim : NOT

【 】 : 現実世界、[] : 話し手の想定世界

T_0 : 状況成立前、 T_1 : 状況成立後

[]_{CF} : ところだった、た (が/のに)

\sim があることで、 $+/-$ が逆転する。

$[(\sim E)^-]_{CF} = [E^+]_R$ 、 $[E^-]_{CF} = [(\sim E)^+]_R$

- ① +事態が使われる場合

E^+ : (彼は) 試験に受かる、 $(\sim E)^-$: (彼は) 試験に受からない

$[E^+]_R$: (彼は) 試験に受かった、 $[(\sim E)^-]_R$: (彼は) 試験に受からなかった

- ② -事態が使われる場合

E^- : (彼は) 死ぬ、 $(\sim E)^+$: (彼は) 死なない、

$[(\sim E)^+]_R$: (彼は) 死ななかった、 $[E^-]_R$: (彼は) 死んだ

1. ① $T_0 : [E^+ \text{ OR } (\sim E)^-]$

$T_1 : [E^+]_R$

(彼は) あやうく試験に受かった。

(彼は) あやういところで試験に受かった。

$T_0 : [E^+ \text{ OR } (\sim E)^-]$

$T_1 : ?[(\sim E)^-]_R$

? (彼は) あやうく試験に受からなかった。

? (彼は) あやういところで試験に受からなかった。

② $T_0 : [(\sim E)^+ \text{ OR } E^-]$

$T_1 : [(\sim E)^+]_R$

(彼は) あやうく死ななかった。

(彼は) あやういところで死ななかった。

$T_0 : [(\sim E)^+ \text{ OR } E^-]$

$T_1 : ?[E^-]_R$

? (彼は) あやうく死んだ。

? (彼は) あやういところで死んだ。

2. ① $T_0 : [E^+ \text{ OR } (\sim E)^-]_{CF}$

$T_1 : [(\sim E)^-]_{CF} = [E^+]_R$

(彼は) あやうく試験に受からないところだった。

(彼は) あやうく試験に受からなかった (が/のに)。

= (彼は) 試験に受かった

$T_0 : [E^+ \text{ OR } (\sim E)^-]_{CF}$

$T_1 : ?[E^+]_{CF} = [(\sim E)^-]_R$

? (彼は) あやうく試験に受かるところだった。

? (彼は) あやうく試験に受かった (が/のに)。

= (彼は) 試験に受からなかった

② $T_0 : [(\sim E)^+ \text{ OR } E^-]_{CF}$

$T_1 : [E^-]_{CF} = [(\sim E)^+]_R$

(彼は) あやうく死ぬところだった。

(彼は) あやうく死んだ (が/のに)。

= (彼は) 死ななかった

$T_0 : [(\sim E)^+ \text{ OR } E^-]_{CF}$

$T_1 : ?[(\sim E)^+]_{CF} = [E^-]_R$

?(彼は) あやうく死ななところだった。

?(彼は) あやうく死ななかつた (が/のに)。 = (彼は) 死んだ

(35)の1は現実表現である。話し手の立場によるプラス状況とマイナス状況の競合関係から、発話時現在プラス状況が現実になったという仕組みを表している。発話時現在の状況がマイナス状況になると、「あやうく」の競合関係と衝突するので非文になる。

2は反事実表現である「あやうく」型は基本的に競合関係の意味が含まれているので、反事実表現においてもプラス反事実を表す仕組みになる。マイナス反事実になると、話し手が故意に自分のマイナスになる状況を選んだという意味になるので、プラスの状況になっている必要がある。

「あやうく」「あやういところで」は意味の違いがない表現であるため、合わせて考察する。この二つの副詞は単なる過去の意味と反事実の意味を持つ。それでは、どのような用例があるのか検討する。

まず、単なる過去（事実）を表す用例である。

(36) 大男はよどんだ目に無気味なひかりをたたえ、斧を手にすすんできます。フェイランが、「ターフーさま」と声をかけると、ぐるりと首をめぐるせ、やにわに斧をふりあげると、フェイランめがけてふりおろしました。フェイランはあやうくよけましたが、すぐそばの床がわれてくれました。(B)

(37) 「たのむ。早く…早くそれをしまってくれ」意志の力を奮い起こし、ジャックにいった。そういうそばから、手が勝手に伸びていき、瓶をひつつかもうと— あやういところで、ジャックが瓶をひっこめた。「ヴィンセント、とにかく、落ちつけ—」(B)

次は反事実になる用例である。「あやうく」型の場合、反事実を表わすために「NCE」の「ところだった」との共起が必須である。

(38) 千九百六／〇七年の冬のみずうみの凍結は、その格好の場を提供してくれた。ところが仕事仲間たちとのそうした氷上の遠出で、あやうく彼は命を落とすところだった。シュテューファの沖合付近で、突然氷が割れ、そばにいた同行者が落ちたのだ。(B)

(38)' あやうく彼は命を落とす。(予言?) (作例)

NCEの「ところだった」が付くことで、「本来なら、～だ」の意味が生まれる。つまり、本来なら「命を落とす」というマイナス状況になるのが自然であった状況が、今は「助かる」というプラス状況になっているという意味を持つ。だから、「ところだった」が付くことで「あやうく」

は反事実表現になる。

「あやうく」型は競合関係から得た結果という意味を持つため、NCEの「ところだった」が付いて反事実表現になる場合もその意味要素に影響を与える。従って、反事実表現を表すときでも事実の状況でプラスの価値を持つ必要がある。

- (39) 6 嘉暦三(千三百二十八)年三月。六波羅探題貞顕の歌会の席で、酒器に毒を盛られる。同席の武士守顕はその場で吐血して死亡。あやうく兼好も一命をうばわれるところであった。(B) → 兼好は生きている → プラス状況

6. 「もう少しで」「あやうく」と予測様態の共起関係

付言ながら、「もう少しで」は近い未来を予想しているため、予測様態を表す助動詞と共起することが多い。元々の意味から、正予測様態(プラス状況)だけでなく、負予測様態(マイナス状況)も表せる。(40)(41)が正予測様態の用例であり、(42)(43)が負予測様態の用例である。

- (40) 現在家事手伝いをしています。祖母が半身不随になり仕事を辞め家族で介護しています(5年間)。特別養護老人ホームの部屋が空くのを待っている状態です。もう少しで入れるらしいので、こんな状況ですが半年後に結婚する事になりました。(B)
- (41) 「そういう関係がなくても、二人は必ずくっつくでしょう。西林の威望と杏蓀の財力はお互いに利益になる。現在ある筋がもう少しで成功しそうです」(B)
- (42) シュタージの課報本部長が選んでよこしたマックス・ゲルハルトは、どうやら、第一印象どおり、もう少しでブツとゆきような精神状態のようだ。なんとか鎮めておかないと、次第に大変なお荷物になりそうだ、とでも考えたのか、ベルナールは半分後ろ向きになり、階段の途中でいきり立っているゲルハルトに、なにか言いかけたような顔で微笑した。(B)
- (43) そのあと、すっかり肩をおとしてキキが歩いていくと、陸橋の向こうから緑色のバスがやってくる。アッ、あぶない!もう少しでバスがキキにぶつかりそうになる。(B)

予測様態を表す助動詞は事実のことは表せないため、過去形と共起しても非現実を表すことになる。

- (44) 「私は兄の人生を受け継いだ。兄の机、事業、機械や装置類、兄の敵、馬たちと愛人を受け継いだ。私は兄の人生を受け継いで、もう少しで殺されそうになった」(B) → 発話時現在、殺されていない

「あやうく」も予測様態を表す助動詞と共起が可能である。しかし、「あやうく」と予測様態助動詞が共起する場合、負予測様態として使われる。

- (45) 体の中の闇を吐きだすようなため息をついて立ちあがると、王様はズボンをはいた。途中、ジッパーがパンツを噛んで上がらなくなり、いらいらしてあやうく壊しそうになった。死を目前にしても小さなことで感情が苛立つのに驚きながら、王様はトロイアの人々と同じだと思った。(B)
- (46) 「このあいだ調べていただいたシャンソン歌手…。花房キキさん」「はい」「去年の秋のスケジュール。どこの、どんな店で歌っていらしたか」「去年ですね」「そう。九月と十月」十月だけ聞くのは、不自然に思われるだろう。九月を加えたところで、やっぱり不自然だろうけれど。「目的はなんでしょう」「わからない。うすうすはわかるけど。言わなきゃ駄目？」あやうく舌がもつれそうになる。うしろめたさが拭いきれない。気心の知れた相手だが、守雄はなにか感じているかもしれない。(B)

負予測様態を表すときの「あやうく」と「もう少しで」は、置き換えができる特徴を持っている。

- (47) 原子力の実験であやうく太陽系が吹つとびそうになる。(B)
- (47)' 原子力の実験でもう少しで太陽系が吹つとびそうになる。(作例)
- (48) もう少しでバスがキキにぶつかりそうになる。(B)
- (48)' あやうくバスがキキにぶつかりそうになる。(作例)

このようなことから、予測様態を表す助動詞は「あやうく」と「もう少しで」の元の意味と共起することがわかる。

「あやうく」は予測様態助動詞と共起することで、話し手のプラス過去は表さなくなり、単に話し手の負予測様態にしか使えない。「あやうく」と予測様態助動詞の共起で負予測様態の意味が出るのは、「あやうく」の元々の意味である「危険」が予測様態に影響を与えたと言える。

「もう少しで」は、普段、近い未来を表す。そのため、予測様態助動詞と共起することで、正予測様態はもちろん、負予測様態をも表せる。これも「あやうく」と同じく、「もう少しで」の本来の意味が影響を与えたと言える。

「もう」は状況の直前、「少しで」は時間の短い幅を表している。つまり、元々の意味は状況が成り立つ時間の幅が短いという意味を持っている副詞である。そのため、予測様態助動詞と共起しても話し手の予測が偏ることなく、正予測様態も負予測様態も表す。

7. 「もう少しで」と「あやうく」の共通点・相違点

以上検討した内容から「もう少しで」型と「あやうく」型の共通点と相違点を考察する。まずは、共通点から考察していく。「もう少しで」型と「あやうく」型は両方とも反事実を表せる。

(49) もう少しで失敗するところだった。(作例) → 成功した → プラス状況

(49)' あやうく失敗するところだった。(作例) → 成功した → プラス状況

例文(49)の「もう少しで」と「あやうく」はお互いに置き換えても意味の変化がない。このように、「もう少しで」も「あやうく」も反事実を表せる共通点がある。

一方、相違点としては次のような点がある。

第1、価値性が(49)から逆転すると「あやうく」は使えなくなる。

(50) もう少しで成功するところだった。(作例) → 失敗した → マイナス状況

(50)' ?あやうく成功するところだった。(作例)

「もう少しで」型は価値性がないため述語にプラス・マイナス状況どちらも使える。しかし、「あやうく」型は述語にプラス状況が来ないと文のすわりが悪くなる。

第2、副詞の後ろに「ところで」が付く場合、「もう少しで」型は必ず反事実を表すが、「あやうく」型は「ところで」の有無が反事実性に関わらない。その理由は、「もう少しのところで」は反事実性が保証されている反面、「あやういところで」は場面切片を表すためである。

(51) ?もう少しのところで成功する。(作例)

(51)' あやういところで成功した。(作例)

そして、「もう少しで」は文末に「のに／が」と共起するだけで反事実を表わせるが、「あやうく」型が反事実を表わすためにはNCEの「ところだった」が必ず必要である。

(52) あやうく失敗するところだった。(作例) → 反事実

(52)' あやうく成功した。(作例) → 事実

第3、「もう少しで」「あやうく」と予測様態の共起関係は違う。「もう少しで」は正予測様態と負予測様態両方を表し、共起に制約がない。しかし、「あやうく」は負予測様態としか共起で

きない制約がある。まず、負予測様態しか表せないのは、「あやうく」の元々の意味である「危険」が予測様態に影響を与えるからである。

- (53) 「現在ある筋がもう少しで成功しそうです。」(B)
(53)' ? 「現在ある筋があやうく成功しそうです。」(作例)

第4、普段は、「もう少しで」は近い未来を表わし、「あやうく」は過去の事実を表わす。

- (54) 薪がもう少しで底をつく。(B)
(55) 「ぼくたちより年上ですし、おそれ多いほどに美人だし。それに―」それにリサさんはプロだし、と言いかけて、あやうく、とめた。(B)

これは、各表現の意味を考えることでその理由が説明できる。「もう少しで」は、ある状況に「少し」という小さい要素が加わることが重要であるが、その「少し」が加わるかどうか分からない状態であるため非現実を表わす傾向がある。その反面、「あやうく」はある状況が話し手の価値観による競合関係にあったことを前提にしているため、発話現場から過去を見る意味を持つのが自然である。

8. おわりに

本稿は三つの疑問点を提起してその理由を説明した。

一つ目の疑問点は、「もう少しで」と「あやうく」の後ろに「ところで」が付くとき、意味変化の様相が違う点である。

違いが発生する理由は、「もう少しで」の後ろに付く「ところで」はNCEの「ところで」である反面、「あやうく」の後ろに付く「ところで」は場面設定の「ところで」であるためである。

二つ目の疑問点は、「もう少しで」と「あやうく」が反事実表現になり得る条件と、両副詞が違う反事実の様相を持つ点である。

「もう少しで」は後ろに「ところで」が付くとき、文末に「ところだった」が付くとき反事実を表す。しかし、「あやうく」は後ろに「ところで」が付いても意味の変化がない。「あやうく」が反事実の意味を持つためには、必ず文末に「ところだった」が付かなければならない。なぜなら、「あやうく」の後ろに付く「ところで」はNCEを表せないためである。

また、「あやうく」が話し手にとってマイナス状況を表す述語と共起したら、文のすわりが悪くなる。その理由は、「あやうく」の中に、話し手がプラス状況とマイナス状況だと判断した二つの価値の競合関係から得たプラス状況だという意味が含まれているからである。だから、マイ

ナス状況が「あやうく」のメイン状況になるのは辻褃が合わない。

三つ目の疑問点は、「もう少しで」「あやうく」と予測様態の共起関係が異なる点である。

「もう少しで」は近い未来を予想しているため、正予測様態（中立予測）だけでなく、負予測様態（マイナス予測）も表せる。「あやうく」は単に話し手の負予測様態にしか使えない。「あやうく」には予測の意味がない。しかし、予測様態助動詞の共起で負予測様態の意味が出るのは、「あやうく」の元々の意味である「危険」が予測様態に影響を与えたからである。

「もう少しで」型は反事実・非現実を表せる副詞である。普段は非過去形と共起して非現実を表すが、過去形と逆接文末表現「たのに」「たが」が共起する場合、反事実を表すことになる。また、副詞に「ところで」が付く場合と、文末に「ところだった」が付く場合は反事実表現が義務的になる特徴を持っている。しかし、「もう少しのところで」と「もう少しで～ところだった」は動詞のテンスが反対になる。

「あやうく」型は事実・反事実を表せる副詞である。反事実を表すためには文末に「NCE」の「ところだった」と共起する必要がある。また、「あやうく」は価値の意味要素を見ているため、プラス状況を重要視する特徴がある。

また、「もう少しで」と「あやうく」は反事実を表せる共通点がある。相違点としては、価値性による反事実表現の制限有無、「ところ」との共起関係の違い、予測様態との共起関係の違い、「もう少しで」は非現実・「あやうく」は現実表現という四つの相違点がある。

田窪（2008）では、反事実解釈が義務的になる要素に対して文末のタノニ形、仮定+状態形のタ形を挙げている。しかし、本稿の分析の結果、「もう少しで」型・「あやうく」型が義務的に反事実を表す場合があることが明らかになった。日本語の反事実表現を定義するとき、文末のタノニ形、仮定+状態形のタ形以外に、「もう少しで」型・「あやうく」型と「ところ」「たが」の共起関係も反事実表現の要素として扱うべきである。

今回の考察では非現実に対する分析が不足であったため、予測様態は付言として言及するところに留まった。まだ起きていない事態（未来）に対する非現実と、起きそうな事態（予測）に対する非現実は、事態が起きていないという点では共通しているが、話し手が今の状況を見ている姿勢が明白に異なる。これは今後の課題ともつながる問題であるため、確実に定義する必要がある。

本稿で考察した表現以外にも、反事実・非現実を表せる表現は無数に存在する。今後の課題として、反事実・非現実を表す他の表現を考察したい。

注

(1) 「もう少しのところで」の「ところで」が場面切片を表すときは、反事実表現にならないため、単なる過去を表わす。

例) もう少しのところで、失敗した。(作例)

(2) 田窪（2008）、p. 42

反事実・非現実を表す副詞

- (3) 前掲書、p. 41
- (4) 「たのに」は反事実表現のプラス状況としか共起できない。従って、「もう少しで」型を使っても「たのに」と共起する場合は、制約が加われる。
- 例) もう少しで失敗するところだった。
?もう少しで失敗したのに。

参考文献

- 国立国語研究所編 (1991) 『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』大蔵省印刷局
- 田窪行則 (2008) 「日本語の条件文と反事実解釈」『日本文化研究』28, 21-46

参考コーパス

- 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)